

街声プロジェクト

チーム街声

■活動内容

大阪市此花区にて、地域住民が自ら地域の特色を発信することで、地域の魅力を再発見し、さらなる愛着を育む文化活動を推進することで地域活性化に貢献。情報の発信にはミニ FM ラジオ発信機を使用し、ラジオ受信機を使用することで情報を受け取る仕組みを提供。

■コンセプト・ねらい

1. ミニ FM ラジオを使用し、ラジオに、ただ単に放送すること/聞くこと以上の価値を持たせ、楽しいからラジオを持ち歩く環境を作ること。
2. 地域住民が自ら地域の特色を発信することで、地域の魅力を再発見する仕組みであること。
3. 我々の活動には裏テーマとして、「減災」がある。この地域は南海トラフ地震において浸水するとされる地域だが、災害で初期情報を得ることの重要性とその際のアナログラジオの有用性を訴えても、それを理由にラジオを持ってもらうことは難しいことから、「楽しいからラジオを持ち歩く」環境を整備し、災害発生時に命を守る行動が取れるよう活動している。

■活動実績

- 演劇の台詞や音楽をラジオで聞きながら観劇する、MobileTheatre を静岡県から招へいし、此花区梅香の四貫島住吉神社境内で開催（1回）。参加者 25 人。
- 自分の好きな色で組立てるラジオ作りや、ラジオバッジにオリジナルラベルを貼るワークショップ等を実施。
ミニ FM の持つ性質をゲームを通して体験してもらい、「自分ならどんな使い方をするか」のアイデア出しワークショップを同時に実施。参加者 55 人。
※オリジナルラベルのデザインは、此花区の広報誌や、此花区で行われるイベント等のチラシのイラストを数多く手がけているクリエイターに依頼した。
- 地域の核となる施設にミニ FM 発信機（無償貸与）を設置し、施設運営者である当該地域の住民が発信者となって、来歴や思いなどを発信。こうした発信機の設置場所（ラジオスポット）に、「ここだけでしか聴けないラジオ（街声ラジオこのはな）」のステッカーを掲示し、MAP をホームページに公開。設置場所（ラジオスポット）は、2025 年 4 月時点で 6 箇所。

■成果・効果

本プロジェクトの参加者 100 人（MobileTheatre 参加者、ワークショップ参加者とその保護者、ラジオスポット運営者、本プロジェクト応援者）。ワークショップ等参加者にアンケートを実施（回答者 53 人）。

本プロジェクトを通じて、

- ラジオを持ち歩く環境づくりに寄与した。

- ・「ラジオスポット」に、ワークショップで作成したラジオを持参し、コンテンツを聞く地域住民が現れている。
- ・アンケートでは、ラジオを持っていると答えた 34 人のうち、持ち歩いていると回答したのは 3 人しかいなかった。ワークショップで、ラジオを持ち歩くことの意義（防災）を聞いて、持ち歩き用の巾着（助成金外のコラボ商品）を購入し、ラジオとイヤホンをセットで持ち歩こうとする参加者が多く見られた。（巾着購入数 35）
- 参加者とラジオとの出会いが生まれた。
- ・アンケートでは、53 人中 19 人がラジオを持っていないと回答（36%）。ワークショップに参加することで、少なくとも 1 台ラジオを持つことになった。
- ・街声プロジェクトのワークショップに参加した小学生の中には、初めてラジオに（意識して）触れた子が複数名いた。
- 参加者がラジオに愛着を持つことができた。
- ・組立ラジオはパーツの色が選べるようになっており、また、ラジオバッジはオリジナルシールのほかデコシールを使って、「自分だけのラジオ」を作成することができた。その後、ロコミで関心を持ったという参加者があらわれるなど、ワークショップ参加者がラジオを他者に見せたり、SNS にあげている様子が確認できた。
- 参加者がラジオの可能性に気づいた。
- ・MobileTheatre は、ラジオを耳にしながら屋外で観劇をする新しい演劇スタイルである。参加者は、耳元で語られる台詞と重厚な音楽を聞きながら、無言で演じられる劇を見るというこれまでにない体験をし、ラジオの新しい使い方に関心を寄せていた。
- ・ラジオ作りワークショップでは、ミニ FM ラジオ体験の後、「自分ならどんな使い方をするか」のアイデア出しを行った。参加者は自身の日常に引き寄せて、様々なアイデアを出していた。
- 例）自身の描いた絵（肖像画）の裏に発信機を貼り付けアテレコさせたい。
 着ぐるみに取り付け、近づくに着ぐるみがしゃべり出すと楽しい。
 大学のオブジェや学生の展示作品に近づくで解説が聞けるとうれしい。
 スーパーの売り場毎に発信機があり、お得情報が聞けるとうれしい。
 街歩きで使うと、離れていても解説者の声が聞こえる。
 謎解きツアーのチェックポイントに使う。
- 参加者はラジオが防災に重要な役割を果たすことを改めて認識した。
- ・アンケートでは、53 人中 12 人（23%）が、災害発生直後にラジオがスマホ等と比較して情報を得る手段として有効であることを知らなかった。そのうち（12 人中）、7 人が、街声プロジェクトのイベントに参加して、それらの情報が重要であると認識したと回答した。
- ・南海トラフ地震臨時情報が発表（2024. 8. 8）された際、「街声プロジェクトを思い出した」、「ラジオを配布するワークショップに早く参加したい」という声が、プロジェクトの応援者から多く聞かれた。
- 地域から要望が寄せられるようになった。
- ・街声プロジェクトの活動を多くの人に知ってもらうために、地域のイベントに参加してほしいという声が寄せられるようになった（参加イベント数 3 件）。

■今後の展開

- ワークショップで出されたアイデアを、地域の住民と共に実現していく
- ラジオスポットを増やしていく
- ラジオスポットのコンテンツを更新していく
- 組立ラジオ等のワークショップを続けていく

- 発信者を増やす
- プロジェクトの参加者を増やしていく
- 地域の要望に応えつつ、プロジェクトの幅を広げていく

モバイルシアター公演



ワークショップ風景



自分だけのラジオ



